



「日本航空は負の歴史を繰り返してはならない」「絶対安全を確立せよ」と訴える林さんと支援の人たち（12日、松山市）



「40年も経ったのですね」と足を止め、チラシを受け取った女性が「がんばってください」と激励するなど、市民の注目を集めていました。

JAL被解雇者労働組合（JHU）の林恵美さん（上写真）は、事故後、経営陣が刷新され、①絶対安全の確立②現場第一主義③公正明朗な人事④労使関係の安定融和――の4方針を掲げたが、新経営陣は1年半でJALを追われることになり、520名の犠牲の上に立った方針がないがしろにされ、いまに至っている」と指摘。

2010年の経営破綻を口実に、安全に対してモノを言っていたベテラン乗務員165名を解雇するに至ったとして、「それ以降、不安全事故例、パイロットの飲酒問題が後を絶たず、安全が危機にさらされている。この職

場の実態を、安全運航に切り換え、お客様に安心して乗ってもらえる日本航空に変えるためには、解雇された私たち乗務員をまず職場に戻すことが必要です」と力を込めて訴えました。

単独機としては世界最悪の520人が死亡した日本航空123便の御巣鷹山墜落事故から40年の12日、「JAL不当解雇とたたかう愛媛争議団を支える会」は、松山市の市駅前で宣伝行動。参加者は過去最高で40人を超え、「日本航空は負の歴史を繰り返してはならない」と訴え、解雇争議の早期解決と安全運航の確立を求めました。

愛媛うたごえ協議会は、「見上げてごらん夜の星を」「あの空へ帰ろう」などを合唱して支援。

日本共産党の小崎愛子松山市議は「今後、このような大事故が絶対に起こらないようにしなければなりません。JALで安全上のトラブルが相次いでいるが、空の安全輸送には知識や技術、経験チームワークが重要な要素で、過去の連続事故の教訓です。職場の要である『モノ言う労働者』の解雇は、空の安全に逆行する。JAL争議が、労働者の権利、空の安全、平和を守る闘いだということを肝に銘じて、これから支援していきたい」と力を込めました。

日本航空は負の歴史を繰り返すな

JAL 愛媛争議団を支える会が宣伝
御巣鷹山墜落40年
事故から40年